

心豊かでたくましい児童生徒を育て
小中一貫教育をめざして

シリーズ えでゆれば

Vol. ⑪

保護者アンケートを 実施しました

昨年3月から連載の始まった「シリーズえでゆれば」も1年が経過しました。教育委員会ではより多くの皆さまが知りたいと考えている情報を提供するため、小中学生をお持ちの皆さまに「小中一貫教育に関する保護者アンケート」を実施しました。

約500世帯からのご協力をいただき、回収率は8割ほどになりました。ご協力いただいた皆さまに紙面をお借りし御礼いたします。

今回はその概要をお伝えするとともに、多くの方からご意見をいただいた項目について回答します。

小中一貫教育を導入した ねらい

図1のとおり、導入のねらいを「あまりよく知らない・知らない」と回答した方は約4割と

なりました。これまでの周知が徹底していなかったことをおわびするとともに、改めてお知らせいたします。

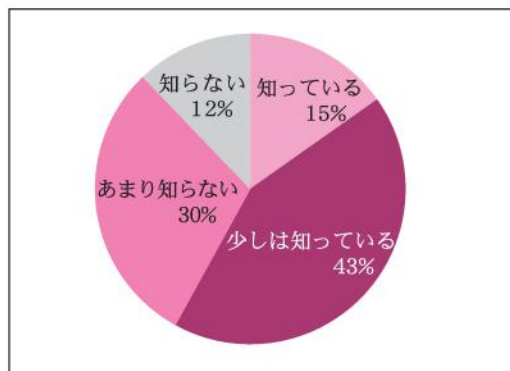


図1 導入のねらい

導入のねらいは「心豊かでたくましい児童生徒の育成」にほかなりません。学校教育法には義務教育の目的を実現するため10の達成すべき目標が規定されています。小中一貫教育はこの目標を達成するための極めて有効な手段であるといえます。子どもの心身の発育が加速化

する中、近年の調査では、小学5年生と中学1年生で学習意欲が低下することや、中学1年生でいじめや不登校などの問題行動が増えることが指摘されています。そこには、子どもの心身の発達と現行の学校制度（6-3制）がうまくかみ合っていないのではないかと、また、小学校から中学校へ子どもの成長は連続しているのに、教える側の意識はうまくつなげていないのではないかとといった要因が考えられます。

例えば、小学校と中学校では教育方法が違う（学級担任制と教科担任制）こと、中学校における学習量の大幅な増加と学習内容の急激なレベルアップや小学校期の子どもが急に大人扱いをされることなどが複合的に作用することにより、子どもたちの心理的負担の増加、学習意欲の低下、学力の低下を招き、それが不登校やいじめなどの問題行動（中一ギャップ）を引き起こす大きな原因と考えられています。

義務教育の9年間を見直し、子どもの発育と学習の連続性を重視した教育を行う小中一貫教育の導入により、義務教育を修了する時点で必要とされる学力

と人間関係力の育成を図るとともに、学校種間の接続を円滑にし、中学校進学時の不安や心理的段差を緩やかにすることで、中一ギャップを解消することが期待されます。

一貫校の体制について

図2のとおり、平成25年4月の時点で、現在建設中である「施設一体型」の三戸小学校・三戸中学校、この学校と離れた校舎で一貫した体制で指導を行う「施設分離型」の斗川小学校、既に「施設一体型」である杉沢小学校・杉沢中学校の3校体制になることを「あまりよく知らない・知らない」と回答した方は5割となりました。

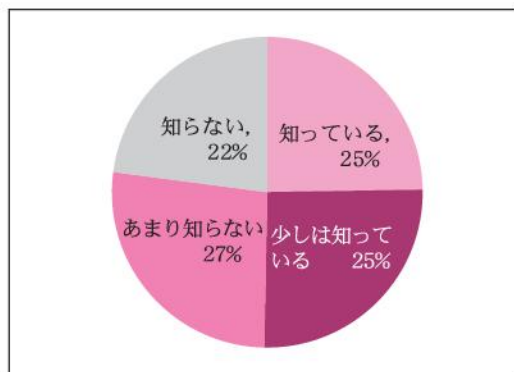


図2 一貫校の体制

期待することや質問

自由記述では、中1ギャップの解消、学力向上、思いやりの心を育むことなど、小中一貫教育のねらいが達成され、子どもたちが心身ともに健やかに成長することを期待するという記述が18件ありました。一方で、平成25年度の開校に向けた質問や不安の声もありました。

- ・小中一緒になることによるデメリットがあるのではないかと
(21件)
- ・連携型の一貫教育となる斗川小学校との関係について
(16件)
- ・児童生徒数が倍増することによる交通事情について
(13件)
- ・制服やジャージ、式典や行事など開校後のことについて
(10件)
- ・今後も継続的な情報提供を希望する
(5件)
- ・その他
(23件)

多くのご意見をいただき、ありがとうございました。不安の声の中で一番多かったデメリットについては、21件中

19件が「中学生の問題行動が小学生にまで影響を及ぼすのではないか」という問題行動の低年齢化を心配するものでした。このことについては昨年の10月号でも触れましたが、改めてお伝えいたします。

兄弟や地域での縦のつながりの中で学ぶ(遊ぶ)機会が減少する社会の中では、小中一貫教育のような環境の中で経験する異年齢集団の交流が、上の子に対するあこがれや、下の子に対する思いやりの心を育むと言われています。

三戸町の小中一貫教育は9年間に4・3・2の段階を設定しており、新しい校舎ではそれぞれの生活空間が区分されています。また、その中間には接続の空間を設けており、状況に応じた異年齢交流が図れるよう配慮したつくりになっています。

中学校入学後の問題行動の増加は三戸町に限ったことではなく全国的な問題です。小中一貫教育の先進地でまず始めに現れる効果としては、この問題行動の減少です。問題行動が低年齢化したという事例は報告がありません。

しかし、これらの事例は単に校舎を一つにしかただけで得られる成果ではありません。上の学年の子どもの自尊心や自己有用感を高めるための効果的な異年齢交流を実施するなど、指導方法や施設の活用方法の工夫が重要です。

これらの工夫を図るうえでも、新しい校舎にできる小中一緒の職員室には、教職員の意思疎通がしやすくなり指導の連続性が確保されるなど、大きな成果が期待されます。

今後も、小学校校間の連携・交流や、町全体での指導方法の統一など、連携型の一貫教育を行う斗川小学校や杉沢小中学校においても同様の成果が得られるような取り組みを進めてまいります。

おわりに

アンケートによると、この連載を読んだことがあると回答した方は76%であり、比較的多くの方がご覧いただいたということが分かりました。今後も皆さまの求める情報を提供してまいりますので、お気づきの点がありましたら教育委員会事務局までご連絡ください。

また、今回お答えできなかった質問などは、次号以降で紹介させていただきます。

校舎の建設が順調に進んでいます

3月下旬の完成に向け、校舎の建設は順調に進んでいます。大きな音の出る工程は冬休み中には終了し、現在では内装工事が進められています。



普通教室の様子